

# 農業土木を 支えてきた人々

## 近 藤 勝 由

— 京都府綾部井堰の恩人 —

近 藤 義 勝\*

### I. はじめに

近藤勝由は文政10年(1827)綾部藩士の家に生れ、明治34年、75歳で没したが、世の中の変動激しいなかにおいて、18歳から農業土木にかけた情熱は永く後世に残るものである。

京都府の綾部市がこの綾部であり、京都府は6府県すなわち福井、滋賀、三重、奈良、大阪、兵庫に囲まれた細長い地域であって、この細長い府のほぼ中央に位置するのが綾部市である。この綾部は旧国名でいえば丹波の国である。気候も山陰地方裏日本独特のものであり、国鉄は山陰線の綾部駅がある。

京都府は山間部が多く平野部は少なく、しかも盆地をなしている所がほとんどで、河川は府を大きく二分して南は淀川水系の桂川、北は由良川、そして、南は表日本で北は裏日本である。

綾部藩の始まりは、寛永10年(1633)九鬼家が徳川将軍家光により藩主に封ぜられてから始まったものである。この九鬼家は往古より南海の海賊(海軍)で伝統の海軍力は実力天下一と認められるものであり、信長、秀吉、家康の三代に仕えたが、家光の政略によって九鬼家が分散させられ、陸地の、しかも山陰地方に配置されてしまったものである。

この綾部地方の農地は由良川が山間部をぬって出てきたところで急に盆地となり、平坦平野が展開し福知山市へと続いて、現在では丹波での一大農業地域を形成している。この農業地域の筆頭に位するのが後述する綾部井堰であり、また地域農地約600haを灌漑するのが綾部福知山用水である。この井堰と用水が近藤勝由とは切っても切れぬものであって農業が営まれる限り歴史に残り末永く続いていくものである。

ここで綾部井堰の沿革にふれると、郷土史では綾部井堰の起源は定かでないが鎌倉時代初期と推論されており、原始的な水利用施設として井堰、水路等の創設によって自然に順応しつつ自然と闘い、水利用の施設を反復維持してきたことが想像される。また室町時代以来木柵であったものが災害のたびに沈石、木工沈床と工夫を重ねられ、コンクリートのない時代の苦勞があつて、その苦勞は想像でき難いもので農民が命の綱として人海作戦的な作業を繰返して井堰本体の維持存続を図ってきたものであろう。

現在この綾部井堰(頭首工)および用排水路施設は綾部井堰土地改良区が維持管理しているが、井堰の所有権は京都府に移管されている。

最近の一大改良事業としては、昭和25年から昭和41年にかけて京都府営事業(都道府県営灌漑排水事業)として永い継続事業を施行し、用水路約8,600m、排水路約7,500mおよび取入樋門の一部改良を行い、満々たる用水が田畑をうるおし、農業基盤が確立されて地域農家の生活の礎となっている。

さて、近藤勝由について、略歴を述べながら人柄と事績の概要について述べる。

#### 略 歴

文政10年(1827)綾部藩士の子として生れる。

天保12年(1848)15才 京都御所勤番を命ぜられる。

弘化元年 18才 江戸勤番を命ぜられる。

弘化2年 19才 江戸詰公用方御徒士目付格を仰付られる。

嘉永元年 22才 代官見習役に任ぜられる。

嘉永6年(1853)27才 代官に任ぜられる

(この年米使ペリ-軍艦4隻を率い浦賀に来る)

明治元年(1867)41才 中小姓に任ぜられる。

明治5年 45才 九州代官所金穀取調役

\* (株)近代技研(こんどう よしかつ)

46才 少属に任ぜられる。  
 明治7年 47才 京都府へ出仕を命ぜられる。  
 48才 綾部県庁詰、金穀出納役  
 明治14年 55才 綾部郵便局長  
 62才 退 職  
 明治34年 75才 没

## II. 勝由の人柄

勝由は幼少より質素な日々を送り、少年時代から従兄の近藤勝直に日常接し勝直を時に兄、時に師と仰ぎ自己研磨に精進した。

その勝直は幼少から父母を亡くしていたため勝由の父母が面交を見ていた。勝直は生来優れた頭脳を持ち江戸において山崎派の学問を修め、次第に奥義を修め、綾部藩随一の学者となり、藩の教育総督ともなり藩校や塾を設け子弟の教育に当たったばかりでなく、三丹一の学者と呼ばれ丹波、丹後、但馬の三つの国にも教え施した。勝由ももちろん勝直門下生の一人である。

また、勝直は文武両道というか、元治元年(1864)蛤御門の変の時、兵5,000を率いて京都老ノ坂(この坂はかつて明智光秀が信長を本能寺に攻めた時の、敵は本能寺にありと方向を一転させたところで有名な峠である)に陣し、天下の形勢如何によっては京都御所を守る構えを見せたことでも有名である。

また、明治元年西園寺公一行が鎮撫使として薩長の軍を率いて西園平定の軍を進め山陰の各藩の帰順を迫ったとき、すでに朝廷方に心を寄せて、天下の形勢を藩主にも部下にも説いていた勝直は、綾部大橋の東まで兵全員を率いてお迎えしたのである。この勝直は明治2年大政奉還で綾部県となったとき、藩主は知事に、勝直は大参事(旧家老級)になっている。

勝由はこのような勝直の教えとともに、自らあらゆる機会を利用して治水と灌漑について勉強を積上げていった。とくに江戸詰時代を有効に使い、読書はもちろん、関東の利根川、荒川等について实地に現状把握研究を重ね、とくに井堰、護岸、樋門、水路、新田開発、水利等の理論と実際を修得した。その際、浦和に親類があって種々便宜を与えてくれたことも大いに勉強に役立ったのであった。

勝由が若くして抜擢され代官になったのも彼の優れたものが認められ、また期待されたためであろう。代官見習いになってからも、権力におごらず、私利私欲を一切持たず、自ら農民の中へ入って苦境を理解し、自分の持てる技能と学問をすべて役立つよう努力した。そして、地元である由良川と領地内耕地の現状を常に把握し用排水

系統に精通していたため、自分の意見は確信を持って誰の前でも主張できる自信と勇気と信念を持っていた。人々にはなるほどと感心を与え、えこひいきすることなく、工事では人々をねぎらい特定のものを取立てるといようなことはしなかった。

勝由の娘「きん」は、晩年、父勝由の想い出を次のように語っている。

「父は小柄で中肉型の体格で病気はほとんどしなかった。質素にして誠実で、娘の私にもこれからは女でも勉強が必要だと、東京に勉強させ親類から師範に通わせた。父は豆腐が好物で朝晩豆腐の汁物は欠かさなかった。現場へ出て座ることなく、ずっと立ったままでした。

江戸詰のとき手に入れた洋傘が雨が降ると喜んでさし、尻からげをして出ていった後姿は今でも目に残っている(この洋傘は、日本に初めて6本入ったうちの1本だといっていた)。現場では当時珍しく、もちろん綾部の人は初めて見るおかしなこの雨具なので、黒い傘が見えると勝由が来たとき、皆気がついたものでした。

天田井堰を綾部井堰に合併のときなど6ヶ村の庄屋を集めて相談いたしましたところ、庄屋たちは経費の点で、とうていむずかしいと申しまして断われましたが、“よし、それなら自分独りででもやる”とあって、その決心のほどがうかがえました。父は全財産を投じたようで、それで借金ができたのかも知れません。フスマ、屏風等も売り、家内では女は内職をいたしました。売った絵の中に円山応挙の絵がありましたが、綾部の料理屋にかかっていたとのこと。また、よく口ぐせのようにいっていたことで1,200人ということが頭に残っています。これは人夫賃のことかも知れません。井堰の計画では庄屋たちが土下座して揃ってやめてくれといってきたこともございました」

## III. 勝由の事績

1. 天田井堰を綾部井堰に合併  
親井堰の修復および連結水路の新設
2. 綾部井堰の根本的復旧  
堰体位置変更と堰体断面の改良および樋門の新設計による設置
3. 管内水利施設の改良指導
4. 管外水利施設(とくに船井郡、南桑田郡の井堰)の改良指導
5. その他農業土木に関する諸問題の指導等である。

測量計画設計は当時藩唯一の人間として、また明治時

代になっても同じく持てる技術で実行に移した。とくに測量の正確さ、計画水量の差引計算、計画水深外の余水の計算的処理（余水吐等）、構造断面の優秀性、ゲートの設計の精密と水理計算の正確さにおいて人から信用された。綾部井堰の樋門は今も使われており、堰長は当時432 mであった。

地域農家による勝由の記念碑等

1. 綾部井堰組有志から延真新溝之記として碑が建てられた。現在、綾部市役所前庭に移され保存されている。
2. 綾部井堰水利組合から近藤勝由翁頌徳碑が建てられた。現在、綾部井堰の左岸堤横に綾部井堰土地改良区により移されている。
3. 近藤池の築造

地元から大工事の喜びを表わすため造られた。現在は、埋められて公用地となっている。

綾部井堰と勝由については、丹波郡誌、綾部町史、綾部市史、綾部福知山用排水路改良史等の文献に随分と記述されているが、うち綾部福知山用排水路改良史にのせられているものから抜粋すると次のように記述されている。

### 1. 綾部・天田井堰の合併

慶応2年（1866）8月の洪水によって天田井堰は徹底的に破壊され、これ以上復旧のために農民を困窮に追い込んではいないと、時の代官近藤勝由は藩主に対し、天田井堰を綾部井堰に連絡して、永久的な解決策を講ずるより外なしと献策した。近藤代官は嘉永元年（1848）わずかに22才にして代官見習となり、同6年代官本役を命ぜられたほどの逸材で、治水工事については、藩中並ぶ者のない学識者であった。藩主隆備もこれに賛意を表したので、近藤代官は観音寺および興の領主側とも相計り、直ちに両井堰の連絡の計画を進めんとした。しかし一方、天田井堰井組の農民は合併工事は至難にして無謀であるとして猛烈に反対し、関係村々の庄屋を伴い代官邸に押しかけ、土間に座り込んで工事中止を歎願するといった騒動まで引起した。しかし、代官はがんとして聞かず、私財を投げうってでもこの計画を断行すると自ら設計にかかり、藩命を受けた大庄屋羽室嘉右エ門の協力を得て、工事にかかったのが慶応3年（1867）2月28日であった。

綾部、天田井堰の連絡は、綾部井堰の落ち水が由良川へ放流する延町の大将軍より、天田井堰の井口（大島町稻荷社裏）まで新溝を掘割り、天田井堰の用水路500間堀につなぐもので、延長8町余、幅4間の水路ができ上がったのは3月8日で、工事はわずか40日間で完成したも

のである。

近藤代官は工事中は夜間も現場に立ちつくして指揮をとり、大庄屋羽室嘉右エ門もまた大声をあげて人夫を督励し、共に一生をかけての突貫工事であったという。それだけにこの工事は予想外に成功し、水運びもよく、下組の村々まで豊富な用水に恵まれ、「衆歓喜して君の功績を称揚」したと延真新溝之記に近藤代官を讃美しているのももっともであろう。

ここにおいて江戸時代の末まで由良川筋の綾部領および天田郡の一部を灌漑して来た綾部井堰と天田井堰は一体となり、延々2里にわたり350有町歩の耕地を養う、いわゆる「綾部福知山用排水」の根源をつくったわけで、両井堰統合は世紀的的重大な工事として忘れることができない。

### 2. 明治初期の綾部井堰（抜粋）

明治17年の出来事として忘れられないのは綾部井堰の堰体（頭首工）の改築である。

明治時代に入ったびたびの洪水のため堰体は破損がちで水上が悪く、ことに明治16年は干天が相次ぎ、日照75日という大干ばつとなったから、翌17年井組において堰体の根本改築を計画し、当時郵便局長の職にあった元代官近藤勝由に依頼して、この大工事を敢行することになった。近藤勝由は井堰構築については地方最高の権威者で維新以後も井堰の修繕について常に井組の要請を受けて指導を続けてきたものであるが、今回のように局長現職のまま大工事の責任者として改築を引受けたことは、勝由の郷土灌漑事業に対する熱意がいかに強かったかがうかがえる。勝由は従来の綾部井堰がいわゆる横堰で、水上りの最も悪い構築であったことにかんがみ、改築に当っては登り堰に改め、井口から川向うの味方笠原神社の下手へ斜に堰体を築くことにした。

それとともに井口の樋門も大改造を加え用水不足を一挙に解決しようとしたものである。いま、工事の概要や設計書等の資料がないので、詳細を知ることはできないが、普請手控帳によって、なかなかの大工事であったことを知ることができる。たとえば、

切留工事	人足	11,140人
飯	米	335石5斗9升8合
水門工事	人足	11,166人
飯	米	333石5斗4升0合

等の記録から見てもその大工事ぶりは想像に難くない。堰体の構造は杭を打ち並べ木の枠を組んで石詰めにする工法で、いわゆる洗い堰構造で莫大な資材と労力を費やしたことは当然である。

### 3. 綾部井堰の恩人近藤勝由

綾部井堰といえば、すぐ近藤代官を連想するほど、井堰と近藤勝由は切離すことのできない存在であり、真に近藤勝由は綾部井堰の父ともいべき人物である。

近藤家系図によると、寛永10年（1633）九鬼隆季が志州島羽から綾部二万石に封ぜられて入部した時随行、代々綾部藩士として九鬼家に仕えてきたものである。幕末のころ、勝由の父勝興は分家して十二石三人扶持を給せられ、勝由もまた15才の時から出仕、京都在藩御用部屋詰を勤め、18才から20才まで江戸勤番を仰せ付けられた。

勝由が綾部切っの井堰通となったのは、生来土木が好きなのに、江戸在勤時代関東地方に発達した大型河川治水事業の実態を見、熱心に研究を積んだ結果であった。

勝由は嘉永元年（1848）22才の時、土木技術の実力を認められ、代官見習として初めて井堰修理にたずさわると、嘉永6年（1853）には代官に抜擢され、以来井堰に関する最高の権威として、改修構築に手腕を発揮し、その名声は近藩にも知れわたっていた。勝由は藩用で京都へしばしば出向いたが、途中、南桑田郡の馬路、河原林などでは大井川の井堰修復について、地元庄屋から指導を求められ、工法等について終始指導助言を与えていたという。それかあらぬか綾部が雪などで野菜の不作の年など、よく南桑田方面から近藤家へ野菜を運んで来る者があったという。

とくに勝由の功績として忘れてはならないのは、前記慶応3年（1867）綾部井堰の水路を天田井堰に結合して、現在の綾部福知山用水路の基礎を開いたことである。この計画は、もし勝由がなかりせばおそらく断行していなかったであろう。先見の明といい、私財を投入してでも反対を押切ってやり抜いた信念と実行力は、永久に偉業として称讃に値するものである。

維新後勝由は京都府役人を勤めたが、明治14年55才のとき、綾部郵便局長に就任した。しかるに明治17年洪水によって綾部井堰の堰体並びに樋門が大損害を受けたとき、この修理のできる者なく、乞われて現職のまま井堰復旧に奉仕したことは、異色のことである。

旧綾部藩領の沃野を養う農民の命水ともいべき綾部井堰を、終生かけて護持した勝由への感謝は、すでに勝由の生前、すなわち明治25年8月、時の郡長宮崎清風の撰、並びに梁筆になる「延喜新溝之記」の碑文に表現され、長く並松の一本木（樋門の近く）に建てられていたが、その後綾部町役場前に、今は市役所前に移されている。

また綾部小学校では、旧校舎時代校門内側の庭園に近

藤池を設け、永く教育の中に入入れ、勝由の遺徳を伝えた。勝由は幼少のころ綾部藩随一の学者であり、従兄に当る近藤東作（勝直）について学び、代官職についてからは土木工事に一身を捧げ、工事に当っては朝から晩まで現場を離れず、とくに堰体工事の折など風雪の日といえども、当時珍しかった洋傘を手にして終日突立って見ていたと伝えられている。

まさに工事の鬼ともいべき人物であったが反面義侠心に富み、郵便局長時代家計の貧しい旧士族の生活を助けたこともたびたびあったという。

近藤勝由翁頌徳碑の碑文に刻まれている事績の要旨を紹介すると次のとおりである。

#### 近藤勝由の事績

氏は文政10年（1827）1月綾部藩に生まる。性剛直苟くも意志を枉げざるの風あり、土木はその最も長所にして理財にまた長ず、嘉永元年綾部藩代官となるや土木のことを兼ね司り部内の土木に竭せしもの勤からず、就中天田堰を綾部堰に合併したる功績の如きは其の最顯著なるものとす。

綾部、天田両堰は共に由良川の流域にありて灌漑反別一は130余町歩、一は170余町歩に渉る大堰なりしも往々洪水に際しては堰体を破壊せられ其復旧維持は村民の最苦痛とする処なりしが、慶応3年8月大洪水あり、天田堰遂に流失し、其復築蓋し容易の業にあらず、村民の憂苦困憊非常なるものあり、ここに於てか氏は断然天田堰を廃し綾部堰に合併せんと欲し之れを藩主に献策して嘉納せらるるや当時皆衆其成功を疑ひ異論百出するに至りしも氏之に動ぜず日夜鋭意計画に力め、時の大庄屋羽室嘉右衛門氏等と相謀り、2月28日起工、隸下の部民を使役して日夜これを督励し以て延喜より大島に至る長さ8町余濶12尺草萊を招きて岩石を砕き苦心慘愴難工事短時日にして天田堰なる井堰に連続遂に其目的を達したり、維時3月8日なり、茲に於て綾部堰の一大水路を以て延長2里余に亘る元両堰の区域全部に灌漑せしのみならず将来の維持費を節減して多大の利益を得せしめたり。

尚又明治17年8月大洪水ありて由良川筋に築造せる井堰及樋門等破壊せらるる処多く衆議之れが復旧工事の施行を氏に囑託するや是亦3旬の短日にて竣成せり。

而も其工事の困難なりし事、前日の比にあらざるといふ、ここに於て明治25年組合員等氏の功績を不朽に伝ふとし元何鹿郡長宮崎清風氏に撰文を囑し之れを碑石に刻み綾部堰の西岸に建立せり、之れ現在の原碑なり因に氏は明治34年9月齡75才を以て没せり。

[1982. 2. 9. 受稿]